

2024年5月10日

「ビキニ核被災70年」の3・1を牽引した高知の闘い（上） メディアにお願い—人間の尊厳かけた裁判注視を—

長谷川千秋（非核の政府を求める京都の会常任世話人）

水爆開発で旧ソ連としのぎを削っていたアメリカが1954年3月1日、太平洋マーシャル諸島のビキニ環礁で行った核実験で、マーシャル諸島の多数の住民と、周辺に出漁していた「第五福竜丸」はじめ多くの日本漁船が被災しました。急性放射線障害で第五福竜丸23人全員の入院、無線長だった久保山愛吉さん（当時40歳）の死去、多数の汚染船が持ち帰った大量のマグロ廃棄で、衝撃を受けた当時の日本国民の間から原水爆禁止の署名運動がまたたく間に全国に広がり、翌年の原水爆禁止世界大会の開催、その後の世界と手を結んだ原水禁運動の発展へと進んでいきました。

◆「ビキニ核被災70年」のメディアを追う

今年はビキニ核被災70年、来年は被爆80年—節目の年の「3・1」にあたり、日本のメディア発信は久しぶりに活気づきました。1月、NHKは横浜市とマーシャル諸島の中高校生たちがお互いの被曝の歴史を学ぶオンラインの交流会を開いた話題を取り上げ（17日）、被害の歴史をどう伝えていくかを考えるニュースを流しました（19日）。2月には毎日新聞が「なるほドリワイド」連載の1つとして『「ビキニ事件」70年』を特集（25日付朝刊）。どちらも被災船の元船員や遺族の中にいまなお国家賠償や船員保険の適用を求めて闘っている人たちがいる事実に触れてはいましたが、どこのだれかまでは言及しませんでした。

それは高知の闘いだ—朝日新聞が2月26日夕刊に1面トップ、ほぼ全面を使って「70年 決意の渡航／ビキニ被曝訴訟遺族、現地追悼式典へ」とうたい、ビキニ高知訴訟と下本節子原告団長（73）の話を前面に押し出したあたりから、日本メディアの「ビキニ70年」報道は一気に活気づいたように思えました。新聞、通信、テレビともマーシャル諸島の首都マジュロで3月1日に開かれた核被害者追悼式典での下本さんとハイネ大統領の出会いをクローズアップしました。共同通信の記事は一部全国紙と全国数十の地方紙にも流れました。

こうなったのは偶然ではありません。1985年、地元にもビキニ被災船の元乗組員がいることを知った幡多高校ゼミナールの山下正寿教諭（現太平洋核被災支援センター事務局長）はじめ教師たちと高校生たちが、粘り強い聞き取り調査によって、若くして亡くなったり、体をこわした元船員が多い事実を掘り起こしたのです。日米両政府は、日本でのビキニ事件の波紋の広がりを恐れ、核実験の翌年早々にアメリカがわずか200万ドルの「見舞金」を払うことで政治決着してしまっていたのです。

「ビキニ事件はまだ終わっていない」。いくら国に当時の被害関係資料を出せと交渉しても非協力。元船員と家族らは労災申請をしましたが却下され、ついに2016年、裁判闘争に踏み切りました。いまなお、粘り強く、労災不承認の取り消しを求める訴訟と日本政府に損失補償を求める裁判の二つに取り組んでいるのは、第五福竜丸だけでなく、延べ1000隻ともいわれるマグロ漁船や貨物船、1万数千人の被災事実を、戦後史の闇の中へ葬らせてはいけない。できる限り多くの被災船員らが存命のうちに法的救済を受け、「究極的には、被ば

くにより奪われた被災船員の人間としての尊厳の回復」（高知地裁への訴状から）を目指しているのです。

2021年、核兵器禁止条約が発効。高知のたたかいはこの年から世界に視野を広げ、世界最大の原水爆禁止の運動体「原水爆禁止世界大会実行委員会」が静岡で開く3・1ビキニデー集会のあと、高知でさらに頑張って「ビキニデーin高知」の集会を持つようになりました。

下本さんはじめ高知代表団の今回のマーシャル行きは、昨年5月の「ビキニデーin高知」に、長年マーシャル諸島の水爆被災調査に通っていた竹峰誠一郎・明星大教授の協力でマーシャル政府の核問題委員会メンバーのエヴェレンさん（母親が核実験被災者）を招いたのをバネに、「被災70年」のマーシャル行きを目指して周到な準備を積み重ねてきたと聞きました。今年は世界大会の主力メンバー・原水爆禁止日本協議会（日本原水協）が代表団を送ることになり、現地でも様々にバックアップしていただいたのでした。

◆なぜ？ 裁判闘争に触れない報道目につく

気になったのは、マーシャル入りした下本節子さんを単に「ビキニ被ばく遺族」の一人としか捉えない報道が目についたことでした。例えばNHKは2月8日、「独自」と銘打って『ビキニ事件』70年の式典／元乗組員の遺族が出席へ』のニュースを流し、第五福竜丸だけでなく、高知の漁船も被ばくしたこと、下本さんは乗組員の遺族だと紹介し、インタビュー。「島民の暮らしや思いにも触れることで核兵器の被害を絶対に繰り返してはいけないという連帯のつながりを作りたい」などの発言を引き出しています。しかし、国を相手に裁判闘争していることには触れませんでした。

共同電を使った日経新聞の3月1日昼の電子版もマジュロでの追悼式に下本さんは「被ばく者遺族」として参列したと報道。多くの地方紙もこの共同電をそのまま扱ったかと思うと残念です。当日は同じ共同電を載せた毎日新聞はどうだったか。直前の2月29日付朝刊（大阪本社版）で「ビキニ、父の苦悩抱き／事件70年／元漁船員の娘、現地へ／被ばく、半世紀後に知り訴訟」と題した長い記事を発信。下本さんが報道などをきっかけに、亡き父がかつて無線士として乗っていたマグロ漁船がビキニ核被災にあったことを初めて知ったこと、同じ境遇にある高知のみんなと手を携え、国を相手に裁判闘争を進めていること、下本さんは「原告団長」を務めていることをきっちり書き込んでいました。

◆読みごたえのあった連載企画も

読みごたえのあった連載報道をいくつか紹介します。地元高知新聞は3月2日付から「追憶のマーシャルビキニ事件70年」のタイトルで、地元高校生たちの聞き取りも受けた室戸船籍のマグロ・カツオ漁船「第五海福丸」の元船員の証言をはじめ、被害の掘り起こしに奔走してきた支援者、国との裁判で闘う遺族らの姿を追った5回の連載。各回タイトルは▽「何も知らされなかった」米国による水爆「ブラボー」の核実験▽元船員の記憶「マグロふててこい」と▽支援者の調査 今、聞かないといけない▽遺族の闘い 核問題 訴える使命▽元教師の信念 やらないと壁は崩れない

朝日新聞DIGITALは「起点ビキニ1954」のテーマで、あの日を起点に世界を巻き込んだ問題を様々な切り口で考える6回の連載（2月29日～3月5日）。①西から上がる太陽、降

り注ぐ灰／第五福竜丸に始まる「唯一の願い」②原爆資料館で開いた原子力博覧会／ビキニ事件の「機密」と米国の思惑③福竜丸たどるインスタ発信、焼津で伝える「僕でないと語れないもの」④あの日父も灰を浴びていた／マーシャルでもらう力、つなげる決意⑤届いた本の表紙は自分／母が体験した核実験、終わらせられない物語⑥「大国のエゴが小国に」／核被害と気候変動、マーシャルからあらがう

中国新聞は「マーシャルからの問い ビキニ被災 70 年」を掲げ、5 回の連載（3 月 12 日～3 月 16 日）。各回テーマは①続く核被害、帰れぬ古里／実験場の住民苦悩②「言われるまま、海で体洗った」／死の灰浴びた住民③核兵器禁止条約④気候変動で国土水没も／故郷追われ「次はどこに」⑤住民は被曝理解できず、世界は長年放置／「声拾い国際社会へ」明星大の竹峰教授

◆5 月 11～12 日はビキニデー in 高知 2024

5 月 14 日にはビキニ高知の法廷闘争 in 東京

主だった海外メディアを調べたところでは、3・1 前後に「ビキニ 70 年」関連の報道は見あたりませんでした。そして、日本のメディアも節目を過ぎてからは関連報道がピタッと止んでしまいました。日本メディアのみなさん、どうか頑張って、世界に発信し続けてください。5 月 11、12 の両日高知で開催される今年の「ビキニデー in 高知」は、ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ、さらに世界のヒバクシャや反核の取り組みを学び合い、連帯し合える集いをめざします。ビキニ高知の裁判闘争もこれからです。14 日には午前 11 時から東京地裁で船員保険訴訟の口頭弁論が開かれ、原告・弁護団は多くの市民に裁判傍聴を、と呼びかけています。

★全国の図書館に置きたい本★



高知のビキニ水爆実験被災者を掘り起こしたのは高校生たちだった！

約 40 年間も地元のマグロ漁船員たちのビキニ核被災の真実を追いかけ、先生の指導を受けながら、学び合ってきた「幡多高校生ゼミナール」の写真記録。元被災漁船員に聞き取りする若者たちの澄んだ目に吸い込まれそうになる。

吉永小百合さんも「この高校生たちのように全国の高校生が一つ一つのことを一生懸命調査して歩いて、自分の生き方とか青春をみつめてほしいと思います」と推薦のメッセージを寄せた。

写真記録「核被災に向き合う高校生たち 核実験被災船を追う高知県・幡多ゼミの活動」(2022 年 12 月、すいれん舎発行) A4 変形版 168 頁、15,000 円。

(元朝日新聞大阪本社編集局長)